

特116

699

高野物狂

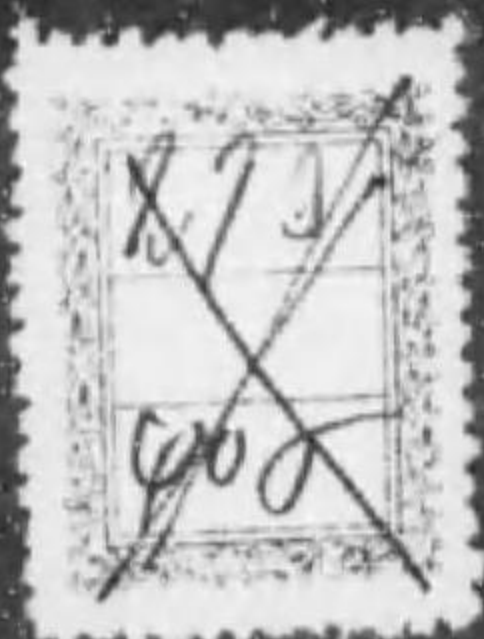
木曾

楠露

菊慈童

觀世流改訂謄本

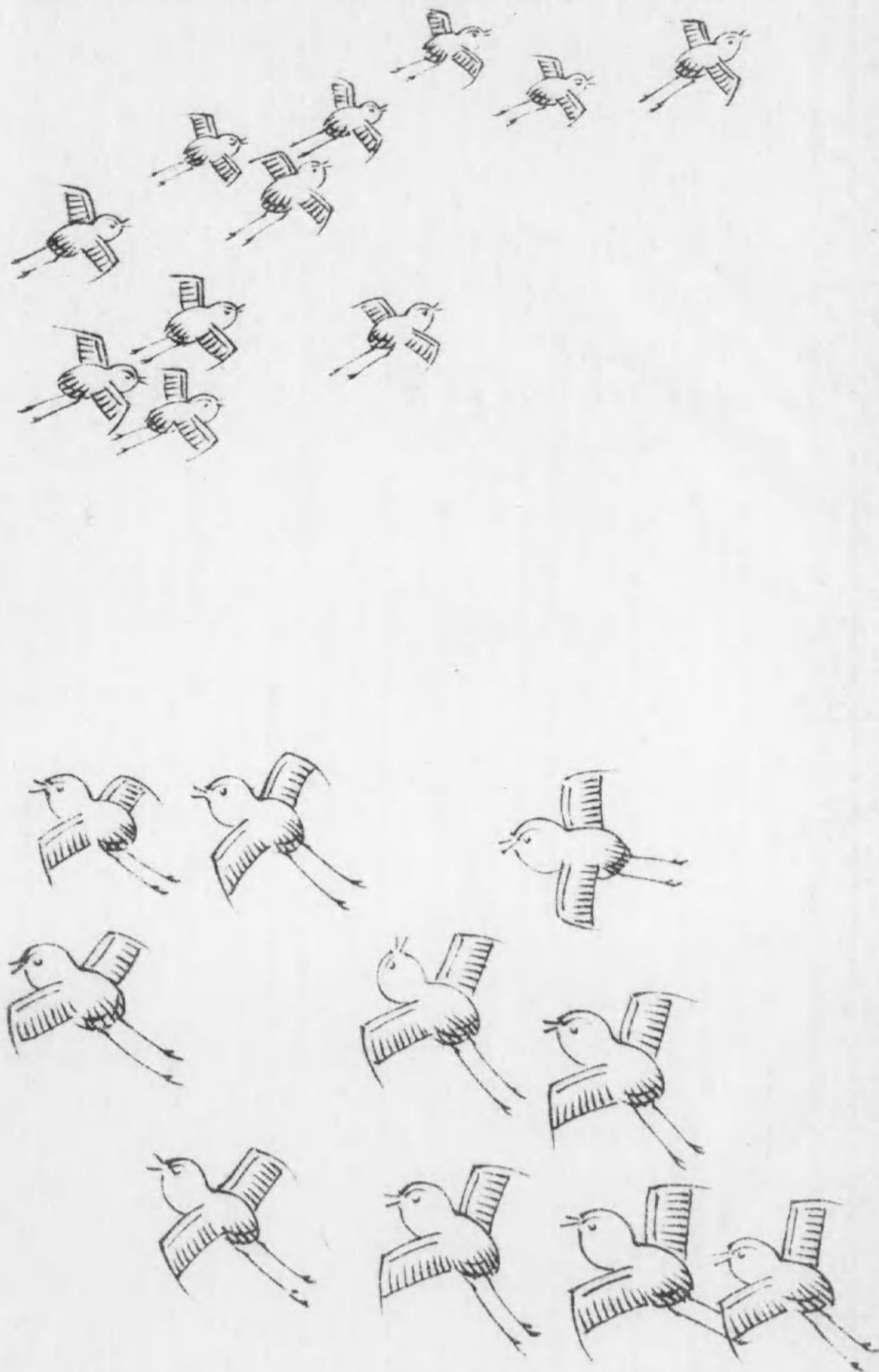
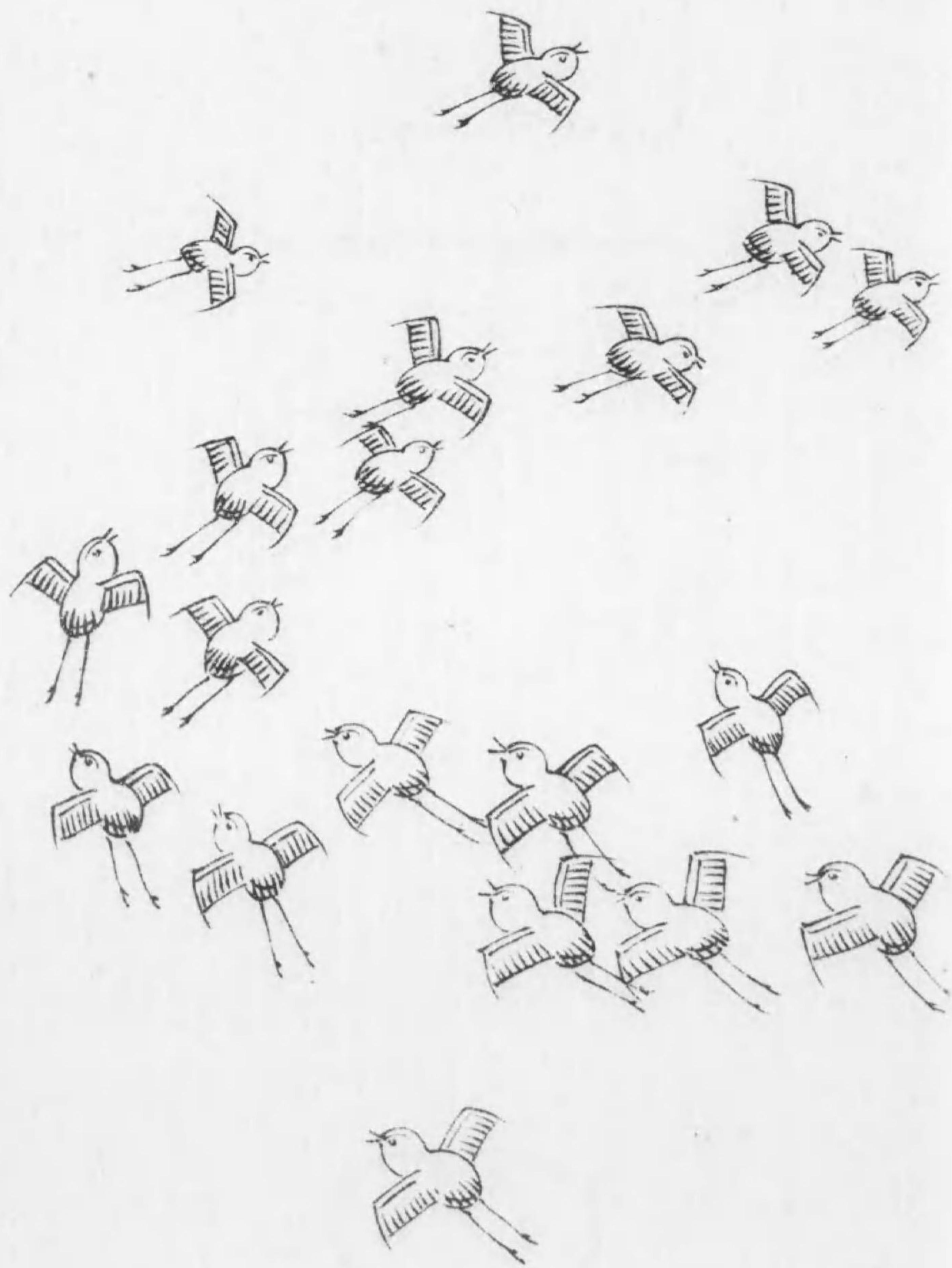
卷二



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





43 116
699



御觀
清之
世之
長

大正
7. 7. 16
内交

文學博士

明治四十年

井上頼園 本文監修

丸岡桂 本文訂正

親世清之 節附訂正

丸岡桂 辭解并補訂

山崎樂堂 拍子附訂正

觀世流改訂本刊行會 節附様式統一

高野物狂

解題

高野四郎といふもの主君の遺児が通世せしを悲しむ、狂氣して尋ね廻り、遂に高野山にて邂逅せしむることを作れり。曲名を異して高野といふ。申樂流儀に世阿弥の作なる由見え能本作者註文には一所に世阿弥の作とし、別に亦作者不明としたり。二百十番流目録に安清作とあるは如何あらん世阿弥の能作者に丹後物狂からあふふか如北遊狂と云く。

語り方梗概

男物狂と作れる曲なるか、狂女シテ、通して狂の重くやうらめやうらめを要す。初の名吉以下は大きくハキキと言ひ、サシは段めて珠勝に確りと出づ。あら思ひやらずや、はむつくりと出で、一息おきて、それ受け難きこと、その文に移り一冊にハツキリと居つかぬやう、法は行き、終の「墨衣」を詠歌の心に受て、確りと扱ふ。後の薄墨に「云は齋を稱上に取り、かくつて出、歸る雁のこゝろ、好く詞に移り、カ、ル、うり、稱序きかたなり、後はいし、ま、を別に、出で、扱ひやかに法に、肌身に流る此文を、はたつやりと扱ひて地に渡す。いつかさては前を承けて出づ。阿答は若者好く確りと應へ行き、事新しき仰かなし、うり、火いづり、わたり、連吟、昔薩埵の「云を稱」に、法ふ、サシはさうりと、クセの上端は、徳なるべし、ワカは朗かに大きく、花壇場は、旅々々々しく、なすらぬやう、乗つて、柳かひりの、に出づべく、高野のうらちには、したて、善通の調子に、返る、や、あれに、ま、す、す、は、ま、は、か、つて、出で、大方の子役と、同、く、ワキ、火いづく、狂を、持、つ、程、の、心、地、初、の上、確りと、下、單、に、い、ふ、が、宜、し、高、め、に、さ、ら、り、と、法、ふ、に、確、り、と、あ、ら、べ、し、地、初、の上、テ、の、氣、を、承、け、つ、ま、し、や、か、た、扱、ひ、書、き、残、さ、れ、し、ま、の、下、歌、は、更、入、て、ゆ、る、や、か、に、次、の、上、歌、は、旅、子、に、な、ら、ぬ、め、や、う、稱、運、び、を、つ、け、て、法、ふ、べ、し、後、の、見、狂、じ、たる、ま、は、前、を、承、け、い、ふ、と、こ、ろ、依、と、云、々、と、付、ら、り、と、麻、蒙、よ、し、の、上、歌、は、引、き、ま、て、更、や、か、た、法、み、な、く、法、ふ、い、つ、か、さ、て、い、し、も、さ、ら、り、と、取、り、三、鈴、の、松、の、下、に、を、は、つ、き、う、と、扱、ふ、べく、阿、答、を、隔、て、大、師、の、持、ち、給、ふ、は、ま、は、柳、か、ゆ、る、や、か、な、る、べ、し、ク、リ、以、下、は、高、野、山、の、有、様、を、述、ぶ、る、處、を、法、は、段、め、て、靜、大、師、好、く、確、り、と、あ、ら、べ、く、ク、セ、は、釋、教、の、心、を、本、と、し、寂、び、を、持、ち、て、珠、勝、に、ゆ、か、き、や、う、い、ふ、る、が、宜、け、れ、と、法、に、地、ま、さ、る、や、う、心、附、を、要、す、い、し、お、東、し、は、別、に、出、で、扱、ひ、や、か、た、大、き、く、氣、を、か、け、時、し、も、春、の、は、火、い、く、ゆ、る、や、か、に、花、壇、場、し、り、華、や、か、た、な、ら、ぬ、め、や、う、稱、ま、り、好、く、か、り、め、に、法、ひ、高、野、の、う、ら、ち、に、は、ま、は、さ、ら、り、と、附、け、て、姑、の、洋、登、し、り、段、々、に、鎮、む、キ、リ、の、下、袖、に、ま、は、か、け、て、出、で、さ、ら、り、と、更、や、か、た、法、に、納、む、べ、し。

高野物狂

は華林園中の龍華樹の下にて三度の法會を聞き一切衆生を濟度すべし **無人聲** 法華經の「寂莫無人聲」といふを龍華三舎の號といへり。次に慈尊三舎の號とありはこれなり。 **大同** 平城
 源がらを叙す。高野山中すは以下、平家物語に「高野山は帝城を去つて二百里、御里を離れて無人聲」とありは據る。舊本「菩提」に作れるは「御里」の轉訛なり。これを今人叙したるは「御里」
 淨土の年号、こゝには二年と作れども、**法性隨緣の月** 私法大師が支那にて三鉢を授け高野山の松に懸りしことは眞淨
 大師の歸朝は實は大同元年十月なり。 **法性隨緣の月** 空海僧都傳、眞雅の贈大僧正空海和上清等大師直弟の著作
 並に元亨釋書、本朝高僧清見元亨。宗性、日本高僧清安文秋には「大同元年八月、遊於本郷、是時之日、祈禱發
 誓云、學教法秘密、若有感應、施者、我新三鉢飛到而點著、仍向日本之方、授揚之、進入空室」云々。其地仁和寺廢遺
 僧正の大師清野山通範の大師清後、**眞如平等の松風** 眞如は藤原高家に偏在する平等無差別の理
 鳥羽上皇御作大師清等に此事見ゆ。 **眞如平等の松風** 眞如は藤原高家に偏在する平等無差別の理
葉の峰 高野山大塔の四方四隅に繞れる峰を内八葉といひ、奥の院の **法性隨緣の月** 眞如法性の本體は
 現するを以て、月影の **八つの谷** 高野山中、峯嶺の間にあり、平地にて溪河にあらす、通例八谷といふは實際は十数
 萬家に宿りて、**八つの谷** 谷の在り、平家物語に「八葉の峯、八つの谷、まことに心もすみぬべし」
即身成佛 肉身の具まう、佛とならるの意、父母所生身、即證 **奥の院** 大師の入定せらる
 深山鳥の聲、飛花落葉の嵐まて、世の生滅 **常住の云** 生滅無常は又常住不變なる本體の現象なれば、
 無常を觀察、想念せむらたよりなりとなり。 **常住の云** 常住不變の佛通に入らむるは、
 皆令佛通は法華經方便品の「皆令入佛通」の字を脱せ **光陰惜也** 願文家訓に「光陰
 りものか、圓覺は圓滿なる靈覺の義にて、佛果の異稱。 **光陰惜也** 可憐壁諾逝水に **時人を待た**
 ざるに **普の陶淵明の句に** **亦云** 貴賤上下群集の多きを雲霞に **常樂の草** 無常若偽
 安樂と執する迷 **聲は高野** 聲は高野に掛く。 **尋ね來** 或は引 **花壇場** 季節の風物を
 夢も覺むらるの意 **傳法院** 聖德法親王の内裏にあり、鳥羽上皇の勅命を以て大治年中に創立せ
 所に配す。壇場は金剛峯 **傳法院** られしもの、後金剛峯寺の住持と此寺の學侶との間に紛争を生じ
 寺のまゝに遺物のある處 **三寶院** 蓮華谷
 正應元年賴瑜寺基を同團那賢那根來に **三寶院** 蓮華谷
 移せり、今新義眞言宗の根本壇場なり。

四番目 畧二番

高野物狂

無季 于方 春満丸
レテ 高師四郎
ワキ 高野山住僧

シテ白

こゝの常陸の國の住人平松殿よ仕へ
 申も。高師の四郎と申も者までい。儲
 も頼み奉る。平松殿へ。去年の秋空一く
 ならせ給ひてい。又春満殿と申ししては
 子息の成座のら。いまだ幼くま。ままよ
 よう。某よものたて申せその成貴とよて

い程よ。片時も離れ申さざる春満殿を
 もりたて申い。又今日平松殿の法忌
 日よ。日向寺よ。素らざやと存い
 昔在靈山名法華。今在西方名阿
 彌陀。安は安示現觀世音。三世利益同
 一體。げよあがたき。悲願か。慈眼
 視衆生悉く。慈眼視衆生悉く。誓

普き日の影の曇るあまの世の所惠後の
 せかけて頼むあり後のせかけて頼む
 あり。春満殿の所文よ。法隨入い
 あり。思ひよらまや。まづく。所文を
 見らま。その受け難き。身
 を受け。達ひ難き。如来の教法よ。達
 事。闇夜の燭渡りの舟待ちえたる

口半白

うして高野寺の僧をいひては
 僧をいひてはいひては
 来り給ひ。其の由を思ふ僧を
 所頼文のいひては。一尋ぬるもや
 らしこと。様いよ。たさう。日を送つ。い。又
 今日三銚の松よ伴ひて。慰め申さ
 かと存のシテサシ上薄墨の書くは音早と見

かのあまの。度めの。空の。常の。雁の。翼よ
 つり。蘇武の。文。それ。故郷の。旅衣。
 君を。いひ。ぬ。い。ぞ。あ。わ。い。も。主君の。所
 ゆく。入。の。空。ある。馬。跡。を。尋。ね。や。あ。よ
 と。は。い。ぐ。の。陸奥。紙。書。か。れ。ま。文。
 こそ。君の。形。見。あれ。あ。ら。お。ほ。つ。か。あ。の
 身。の。行。く。や。あ。呼。子。鳥。誘。を

けし。花の行くを尋ねつ。風狂
 トたる。心あ。肌身よ添よ。此
 文を。ふとらうがみと。人や見ん
 麻裳打上が。紀の園越えてあは聞き。
 紀の園越えてあは聞き。こわや高野
 の山深み。敷葉みの木蔭わけ行けば。
 こも筑波の山やら。こ我う方を思

出の昔のかりまひも。猶我がま君
 恋一やと。夕山松の根をよ道や。いざや
 狂ひ登らん。いざ。狂ひ登らん。あまら
 昇る雲路の。まら昇る雲路の。こら
 いらく高野山よ。まら見て見れば。たよと
 やあ。或は念佛。稱名の聲。或は見鐘
 鈴の聲。耳よ深み。心澄みて。物狂の狂

あり早。あやうの出家の望あらば何
 ぞ様をぶあつかひぞシテ 姿を更め
 ぬこそ發心初縁の形あり早 おこと
 發心初縁あらば。人佛不二の道ハ知れ
 りやシテ 事新シテき行おあ。かたドけ
 おくも大師の身ハ。内心ニ昧目前
 あり。これぞぶ早く人佛不二早 おう早

殊勝ありげも大師カレ上ハ生ありあがら
 生死涅槃早。入シテ家早また高野
 の奥早。今此山早のあた早。昔早薩早
 埵の印明を授かり。慈氏早の下生を
 待ち給早。事早。人佛不二の妙體あり早
 大師早の待ち給早。小早。慈尊早三會早の曉早。
 われハ三世早の。皇君早を尋ねてこの高野早

山ノよク来リたり申す
 抑シこの高野ノと申ス
 まカるル帝都ノを去リつテ二百里ノ家ノを離レ
 りテ無ク聲ノ無クの隱所ニ
 して結界ノ清淨ノの道場ナリ地ノ中ノよ
 も此三結ノの松ノ也ト大同二年ノ唐清朝
 以前ノ我ガ法成就ノ圓滿ノ地ノ也ト
 残り留マりシて三結ヲ投ゲさせ給フ

此松

ひノ一ノの光ノももよノ飛ビ来リ。此松ノ
 梢ノもノまノれノつノそノもノくノ諸本ノ
 中ノよノあノまノりシて地松ノよノ留マるル其ノためニ。
 千代萬代ノの末ノかけテ久シかレたノ成ニ
 誓願ノ委シくノ舊記ノ載セらレたりカ
クセ下されドもノやノ真如ノ平等ノの松ノ風ノハノ葉ノ
 の峯ノをノ静シよノ吹キ渡リ。法ノ生ノ有ル縁ノ

月の影ハハつこの谷の母をさざりてまこと
 ともな會の暁を待つ如くあり。さて
 こそ即身成佛の相をあらわし入定
 の地を示しつ。深きたる奥の院深山
 鳥のこゑ澄みて。飛花落葉の嵐まで。
 無常。觀念を勸む。いへども又常
 任の比。今佛道圓覺のよりをあらわす。

あり。然れば時移り事去りて
 四季をうくのおのづから。光陰
 惜むべし。時人を待たざるは貴賤羣
 集の雲霞。かゝる高野の山高み谷嶺の
 風常樂の夢さめ。法の稱名妙音の
 法身は残り満ち満ちて。唱へ行ふ圓
 法の聲ハ高野よ。静なる靈地あり。

けり 上カ又 尋ねき 中ノ舞 霞の奥の高

野やま 地中 時も春の シテ中 花壇場 シテ中

花壇場 地 月傳法院 シテ中 紅葉三寶院より

も猶深く シテ中 雲ハ奥の院 シテ中 くれよりもこれ

よりも シテ中 常盤石の三鈷の松蔭よ

まらよ シテ中 春の風狂 シテ中 たる物狂物狂

あら シテ中 怨れや 始方 高野のうらちよ シテ中 てる

高野のうらちよ 地 てる 上カ又 龜ひ狂 シテ中 め シテ中 唐制戒を

忘れて狂 シテ中 したり シテ中 許させ シテ中 給へ シテ中 所 シテ中 聖 シテ中 許

させ シテ中 給へ シテ中 所 シテ中 聖 シテ中 許 子方 や シテ中 あ シテ中 い シテ中 う シテ中 よ シテ中 あ シテ中 れ

ある シテ中 高師 シテ中 の シテ中 四郎 シテ中 よ シテ中 てる シテ中 あ シテ中 れ シテ中 う シテ中 何 シテ中 して

ころ シテ中 ま シテ中 まで シテ中 来 シテ中 り シテ中 た シテ中 る シテ中 ぞ シテ中 や シテ中 あ シテ中 れ シテ中 よ シテ中 ま

ま シテ中 ま シテ中 へ シテ中 春 シテ中 満 シテ中 殿 シテ中 よ シテ中 てる シテ中 唐 シテ中 座 シテ中 の シテ中 う シテ中 何 シテ中 して

ころ シテ中 ま シテ中 まで シテ中 来 シテ中 り シテ中 た シテ中 る シテ中 ぞ シテ中 あ シテ中 ら シテ中 情 シテ中 の シテ中 所 シテ中 詞 シテ中 や

たどひ馬身うまみを捨て給たまはも。いづでら
 捨てさせ申まをまへた馬うまの心を静しずめて聞き
 めせ。平松ひらまつの成なり名な字じを誰たれうつがせ給たまは
 らん。まづ此こゝ度た又また馬うま帰かへつあつて。さて
 其その後のちハハもかかくも。成なり意いをぶぶああとら背せ
かんとと馬うま袖そでよよううつつかかて。三さん世せの
 契ちがひ朽くちちせせねねど。ここれれままでで尋たづねね紀きの國くにや。

詞
 馬意をいふもどら
 背のしん
 トモ

高野たかのの山やまの陰かげ頼たのむむ主ま君きみよよ速すみよよとと喜よろこ
 一いかか——キリ中ままくくももいいかかいいままああららかかいいとと高たか
 野ののの上の上のままささららししとと。かかたたりり慰なぐさめめ古ふる里さとよよ。
 馬うま供たまご申まをしし帰かへつつ。ままももよよままくく末すえ禁いんむむええ
 けけりり。ここれれもも法はふををいいめめのの。大だい師しのの惠めぐみ
 ありありりけけりりやや。大だい師しのの惠めぐみありありりけけりり

つなきをや、遂に照覺し修むけん、空の中より山鳩(或、哀記には白鳩)三つ飛びまつて源氏の
 の白旗の上に翻翻すとあり。また同書に「鳩は八幡大菩薩第一の使者なり」。源氏は源風・加護神の
 神力 威力

願書 (平家物語)

源氏復讐八幡大菩薩、日成朝廷の本玉累世明君の景運なり。寶祿を守らんがため、蒼生を利せんが爲に、
 三身の金容を顯し、三所の権座を押し開き候へり。爰にいきりの年以來平相國といふものあり。四海を
 管領し、萬民を愷亂せしむ。これ既に佛法の怨、王法の敵なり。義仲苟も弓馬の家を生れて、僅に箕裘を
 の塵を離れ、彼暴悪を棄するに、思慮を顧る能はず。運を天道に任せて身を國家に投ぐ。試に義兵を起
 して兇器を退けんと欲す。然るに關戰西家陣を全すといへども、士卒未だ一座の勇を得ざる間、區々の
 心を起したる所に、今一陣に旗を卷ぐ。戰場にして忽に三所和光の社壇を拜す。機感の純熟明らかなり。
 兇徒誅戮疑なし。歡喜涙こぼれて湯仰肝にそむ。就中、曾祖父前陸奥守義家朝臣身を宗廟の氏族に寄附
 して名を八幡太郎義家と稱せしよりこのかた、その門業たる者帰教せずといふことなり。義仲その後胤
 として首を傾けて年久し。今この大功を起すこと、譬へば嬰兒の目を以て巨海を量り、螭斷が斧を起ら
 して陸軍に向ふが如し。然りとはいへども、國のため君のためこれを起す。全く身のため家のため
 てこれを起さず。志のいたり、神聖をらにあり。頼もきかな。悦ばしきかな。伏して願くは、冥顯成
 を加へ、靈神力を助せて勝つことを一時に決し、怨を四方へ退け候へ。然れば即ち再新冥慮に叶ひ、玄
 攀加護をなすべくは先づ一の瑞相とも見せしめ候へ。
 源 義仲 殺白

壽永二年五月十一日

四番目 畧二番

本曾

五月

ツツレ 池田次郎 木曾義仲 木曾坊覺明

ツレ 從兵

覺明 義仲 池田 從兵 佐仕 ツヨク

ハ百萬神も引まきまきかごの名の弓
 矢の道こそ久しけれ
 本曾義仲と我ら事あり
 平家の越前の燧ヶ城を攻め落し
 都合其勢十萬餘騎此燧ヶ山まで
 押よまき
 身方ハ僅五萬餘騎

覺明 池田 從兵

義仲上

義仲

木曾

討略を以て討つて... 白旗數多
この入つて黒坂のよま... 敵
の心を疑ふ... 使よ
のう大手搦手より一度よ... 俱利
伽羅が谷へ敵を落さんと... 用意を
あて義仲ハ用意を... 義仲ハ
勢を七手よ別ちつ... 其身ハ殊よ精兵

豊明池田
從六

一萬餘騎を... 陣をぞ
まうよける... 陣をぞまうよける

池田

よま... 白旗... 平家の
勢... 源氏大勢向う
たる... 備前
備前の處ありと... 備前
備前の處ありと... 備前

馬場と申す處に陣をたてしる義仲とて
こそ義仲が願ふ處ありた。あはれに
今明日たるべし。かまへて身方を戒め
戦をせしめて。夜よひつて押寄せ
かゝりし。面は其由申入池田累池田
る義仲。いふは池田の次郎。是は前よ
りて。あはれに。夏子のまじりて女の

うちよ。米の玉垣ほの見えて。かたは
道の社あり。あはれに。いふ由に
いふある神を出祭め奉りた。いふ池田か
あはれに。植生の八幡宮にて。あたら
給ひ。此處もその諸領の地と
義仲何と無う陣とあり。八幡の
地あり。こそ吉兆あり。いふは賢明

覺明 所前カの 著仲 かつら後代コトの為ニ。つら

當時トキの新ニ禱ヒの為ニ願書ガクを素カらせしと

思シひハいハいハよク 覺明 忠チウ諫ケンの如ク。忠願書チウケンショを

忠チウ奉ホウ納ナツあつて然シカるニずラいハ 著仲 忠チウあハらハん

願書ガクを書キきテ入ル 覺明 畏オソづクてハいハ 覺明 畏オソづクてハいハ 覺明

仰オホせテ承ケりシ 殿テンのウちヨりモ 殿テンのウちヨりモ 殿テンのウちヨりモ

らハちヨりモ 小コ硯エン料リョウ紙シとリいハだシ。墨スミ

願書重訂
書き終り或前
於い読み上る

まハりハ筆ヒツを和ワけテ思シひハ案アンぎムの氣キ色シキ

もハなくシ古書コショを寫シきテ如クもトてヤらシて

願書ガクを書キきテ終ル 覺明 何ニ命メイ頂テイ禮レイ

ハハ藩ハン大ダイ喜キ蔭インハ日域ニッポク朝廷テイテイの本ホを目録ロクせシ

明君メイキウの日裏ヒラ祖ソたりシ寶祚ホウソクを守らんシが

たタめニ蒼生ソウセイを利せんシがタめニ身ミの為にシ

金キン容ヨウをあらシてハ三處サンチョの権能ケンノウをあらシ

木曾

四

南を給へり。爰は北の國にあり。此方
平相國といふものありて。四海をた
ごらる。萬民を懐かしむ。これ
佛法の仇王法の敵ありとも。曾
祖父前の陸奥の守。名を宗廟の民族
に歸附せ。義仲とや。くも。其後胤
とて。この大功をあらはせ。たゞ

嬰兒の壽を以て。巨海を削り。當
柳が芥を以て。陸軍は向ふ如く
あり。然れども君のため國の爲よ。これを
起すのみあり。伏して願をく。神明
納受垂れ給ひ。勝つことを究めつ。
仇を四方に退け給へ。壽永二年五月
日。高らあよ讀み上げたり。本曾

殿を初めとして其座より兵ども
眞よ又其の違者あかると皆覺明を
ほめよけり義仲上義仲上差拔き出
これと願書よとう添入て内陣よ納め
よと覺明よ賜されば覺明これを
捧げ持ち出前をまきとてゆへも
ハ藩の宮よ進つてハ藩の宮よ進り

けり覺明しつ由一上げの願書並よ

序上差の鋪ハ藩の宮よ奉納仕り
てい。又此庄の土民軍の陣門出を祝し

酒肴を奉りてい義仲かゝめでたき事

こそあけれ。此度の軍よ勝たしむる事

必しあり。さらば軍の陣門出を祝よべし。

覺明酌覺明よ進ち入覺明畏つていハ藩の

宮の神風よ 敵の本の葉と散らぬ

舞ひ入

敵の本の葉とちりぬ

酒宴も

不思議や八幡

身方の

旗手よ飛び翔り納豆のきり

善仲白

覺明

地上

男舞

上

地上

表一けれだ本曾殿をほめ軍兵
どもは皆一同よ伏一拝みいよく加
護をぞ願ひけるこそ平家の大
勢や具利伽羅が谷よ追ひ落した
一戦よ勝利を得もまことよ八幡の
神力あり

千早

河内國南河内郡金剛山の西南腹、正成の築けりといふ千早城のありし地、太平記に、正成の命を養由が美さきたりかけ、義を記信が忠に比すべし、是を以て第一の孝行ならんす。...

最期

誰に面を向け候べき、人にあはする類、召し具し、言の葉に、無くと、...

逆徒

敵逆の、敵聞、天子の聞こ、教諭、のり、正成謹んで、太平記、...

坊門殿

藤原清忠左近衛中将俊輔の子左大辨春議從二位なり、世々坊門、...

良薬口

孔子家語に、良薬若於口、而刺於病、忠言逆於耳、而刺於心、...

藤房の卿

藤原宣房の子、右大辨、春議、檢非違使、別當等、を歴て、中納言とあり、...

獅子の子

以下、獅子は子を谷に落して、其勢を試みらんと、猛禽の思ふ、...

私心

下露の撫子の花に、かゝるに、寄せて、いふ、撫子、は愛撫する幼児に、...

石に

可し、東雅に、石楠といひしは、即今も、俗に、此木、又、芳野、拾遺、に見えたる、楠、...

鄙人

田舎、菊水、千代に、傳へて、聞くといふ、承く、太平記に、菊水の、刀、菊水の、旗、...

四番目
畧二番

楠露

五月

ト子ツ
モ方レテ
從正正
者行成一

ツレ付

この楠正成あり。たゞも朝敵尊氏
大擧しして上洛まじり由間一めたり。
意をかゝ成し馳せ向ひ。義貞よ力を合せ
よとの旨旨よ任せ。唯今一兵庫の津入
羅つちらひ。又存まじり細のり向。正行を
た田く及たがふや。田はひ。し。よ。誰らあり

らんがの心もあはれに最期をなさむと
 見て誰も回を回せざらん。舞はる舞はる
 し舞はる舞はる。舞はる舞はる舞はる
 者もあはれに皆朝廷の侍をなさむと
 らん千早の侍をなさむと。舞はる舞はる
 あはれに舞はる舞はる舞はる舞はる
 舞はる舞はる舞はる舞はる舞はる

やと思愛の心をなさむと。舞はる舞はる
 満も。行も満も。舞はる舞はる舞はる
 葉も。泣く泣く袖を濡らす。舞はる舞はる
 気色もあはれに舞はる舞はる舞はる舞はる
 語つて聞かせん。舞はる舞はる舞はる舞はる
 兄弟。西海より大軍を率ふる。舞はる舞はる
 より。殿向の舞はる舞はる舞はる舞はる

向ひ。義貞もろもろの御代まじかゝる較
 諒なり。正成謹して申す。いかに
 此度逆徒能うよ事。新平の御軍
 ことし。勞れたる官軍を以て。いかに
 いらし事。あらく存。もよらむ。義貞を
 君。返さる。今一度。叡山。入。行幸。あ
 奉り。あ。必。定。逆。徒。上。洛。仕。入。一。其。時

疑ひあるは

正成の糧道を絶ち。義貞と内外より
 攻め。あ。こ。よ。於。し。て。恐。あ。ら。は。勝。利
 疑ひ。あ。る。は。必。勝。の。計。議。を。申。し
 上。り。ま。し。た。ら。ん。と。中。の。殿。の。ま。い。り。ま。て。
 既。に。防。戦。の。言。事。偏。に。大。軍。の。ま。ま。で
 あり。あり。地。クリ。上。に。日。月。入。り。明。ら。あ。れ
 とも。雲。霧。光。を。覆。ふ。ら。び。今。よ。始。め

ぬ事ありとも。歎きても又あまりあり
 ツレサシ
 良薬口は苦く。忠言耳は逆よといふ
 其故事を悟り給ひ藤房の卿ハ世を
 遁れ今成る門出もなきはさう哉
 夫の猛烈の心さう清く世をいさ
 めんと思ふあり 獅子の子を生
 むて三日を経る時ハ數千丈の巖より。

中
 これを投げて試み其子獅子の氣力
 ありば教へざるは中より跳ねあがりて
 死せざるとし入り。泥んや正行十歳は餘
 りぬ一言耳は留めつ。此教戒は違は
 ざらん。あれ討死と聞くとも歎きをさ
 めいづこもまでも朝敵を平けて。取軍の
 開けし事を思ふべし たるは平賊

日の本よ 地 羽をのー 嘴を鳴らさむ。
 命のあらん其程の 帝位を守護ー
 私の心 上 跡を汚名を残さず
 あられ ち まじり思ふ撫子よ 下 涙や
 楠の露 ウ 晴 ウ も頃ハ五月雨の 下 ある
 枝も繁る下草の 葉よ志をさす 袂 下 かな
ツレ 花散りて 春ハ暮れり 櫻井の 下 名よ

だよあつて 上 打ちせむ 上 今 上 がある
 玉楠の葉の 恨も何らあはれ 上 あり
子方 鄙人 上 までもあはれ 上 知る 上 恩愛
親 子 上 至 上 後の 上 別 上 も 上 今 上 更 上 よ 上 涙 上 を
シテ上 袖 上 満 上 一 上 ぐ 上 お 上 酌 上 よ 上 さら 上 して 上 さら 上 あり 上 せむ
ツク 清 上 き 上 の 上 名 上 を 上 千 上 代 上 よ 上 傳 上 へ 上 て 上 菊 上 水 上 の
地 流 上 へ 上 ー 上 せ 上 渡 上 川 上 諸 上 人 上 の 上 鑑 上 と
男 舞

あつてまきらさの
 地上 花橋の白ひ
 ぬるあま白ひぬるあま
 刻も後もある
 地上 帰れといさ
 ぎよまの行よ従よ
 従よまの行よ
 ひるがへその名も清も
 河内の國
 帰る孝行
 中義の
 ためぞありがたま

菊慈童

解題

魏の文帝の臣下、勅を奉りて鄴縣山の麓に流るる葉の泉の源を尋ね入りて、周の穆王の時より菊水の仙術を得て七百歳を経たる慈童といふ仙人、菊酒の罍を授け奉りて遊弄をなしたることを作れり。太平記に出でたる慈童の故事に基き、重陽の宴に用ふる菊酒の罍を作れるものなり。此曲古くは前後二節より成る長篇なりしが、後世専ら祝言能として演弄する便を旨とし、其前段と看し、後段の文をも約めて、今日の如く半能の曲とせり。省かれたる前段は、穆王の代に慈童遇つて帝の御杖を越えたる罪に依り、仙人に護られて鄴縣の深山に捨て置る。一條を作れるものなり。古くは杖慈童と稱へしが、前段と、杖の過文につきて作れるサシクセの一章とを看きしため、作中杖の事少くなりしより今日の如く改めたりと見ゆ。別名を鄴縣山といふ。鄴縣は太平記の隋朝にもてつけんと見え、古くてつけんざんと読みたるより、曲名をてつけん山と記したるもあり。又杖慈童を若くして杖といへるもあり。前曲、杖慈童(杖曲と同名なるも同トからず)菊慈童(同トく別曲。一名、彭祖仙人、廢曲)、菊水慈童(一名、菊水、廢曲)は皆杖曲に學びたる後作なるが如し。

謡ひ方便概

杖慈童の姉妹曲なり。全篇軽くすらし。シテ童子なれば重くならぬやうに注意して聲なきを宣いとす。サシは其の身のなれる果を啣ちつぶやく心なれども、さして聲を抑へず、又流聲に陥らぬやうさらりと流ふ。ワキとの同答になり、又倫通はぬ云々は後やかに承け答へ、不思議や云々は氣を起して少しかつて向ひ、こゝや猶も云々はすつきりと出で、かた下けなくもより丁寧に言ふべく、次の掛合、杖の要文疑いなくはさらりと取り、連吟にて脚水鏡めて殊勝に扱ふべし。ありがたの妙文やなは位を有ちて大きやかに確りと出づべく、本ワキ 健やかにハキくとあるべし。名寄の後、急ぎに云々の上敷はシテの氣を承けて稍ゆるやかに附け、頼めにしより聊か更へて少く氣を起す心なるべし。此妙文を云々は稍確りめに承けて、樂の前、面白の遊弄やなと十分に鎮む。すなはち杖文以下は來つて爽やかに調子好く扱ひ、引き續きキリにかけて、通して脚代を現ひ、終をことごとく心なるべし。

辭解

山より山の 實陸の道と改道とを言ひかけて、山奥の奥に至るまで道の狭けるは若の徳りたるな。魏の文帝 三國の魏。曹 鄴縣山 河南鄴州内鄴縣にあり。前州記に、鄴縣北八里有山、名曰、魏の文帝 孫の子、丕。鄴縣山 河南鄴州内鄴縣にあり。前州記に、鄴縣北八里有山、名曰、

下から「夢」から程よ。いしてはや「郡」縣
山よ著かたし。いしては「庵」の見えたる。

まづ此あたりの「徘徊」。事の子細を

窺シテサシ上やと存ヨククる。それ「邯鄲」の

枕の夢。樂むといふ百年。慈ミ重シが枕の

まへの思ひの寝もわが目もあたまも

^{地上}夢もあつら。しつ樂ウみを松がねのしつら

樂ミみを松が根の。嵐の床よ假イ寝して。

枕マの夢の夜もまがら身ミを志シる袖スベはほ

さレぎキ頼タめメのヒあハひコそノあハけレれヒと

りねの枕詞ぞ恨ハある。枕詞ぞ恨ハある。

^{コ羊行}不思議フシギやお此山中コノナカの。虎コ狼ロ野ノ平ノの

栞シあハらハいハつテあハるウ庵アの内ウチよハつテもハ現アれ

出デづクの波を見たル。其ノ様サマけーたノ人ト向ム

あり。ある者ぞ名を名のぬ^ニ倫^ニ
 通はぬ處あるも。其方をいそ^テ仕^スまの
 者より由まぐ^レひ^レて。い^レて^レ周の穆^クま^クよ
 召^シ使^サせ^レ。一^ニ。茶^ハ音^ハ音^ハあ^ラわ^レ。日^ハ果^ハぞ
 る^{コト}よ^ク。コ^トハ^ハ不^レ思^レ議^ノの^ハい^レひ^レ事^ハあ^ラ。あ^ラ。
 真^ニ一^ニ。あ^ラも^レ周の代^ハ。既^ハよ^ク數^ス代^ハの
 その^ハあ^ラ文^ハも^レ。位^ハも^レ其^ハ數^ハ移^ルつ^テあ^ラぬ

不^レ思^レ議^ヤあ^ラ。其^ハあ^ラ。昨日^ハや^ラ
 今日^ハあ^ラ思^ハ。一^ニ。次^ハ弟^ハは^レ愛^ハの^ハあ^ラ文^ハ
 る^{コト}。移^ルまの^ハ位^ハ。い^レ。あ^ラ。今^ハ魏^ハの^ハ
 文帝^ハ前後^ハの^ハ回^ハ。十^ハ百^ハ年^ハよ^クあ^ラび^レたり。
 非^レ想^レ非^レ想^ハの^ハ知^ハら^ズも^レ。入^レ回^ハあ^ラ。今^ハ
 まで^ハま^レ。ひ^レ。者^ハあ^ラ。一^ニ。い^レ。あ^ラ。代^ハの^ハ
 者^ハあ^ラ。この^ハ身^ハの^ハ怪^ハめ^ハ。い^レ。あ^ラ。一^ニ。ひ^レ。

ミト 我猶もひそなたにんてんせの者ら申

まぐらひて。きんも。帝の座。枕よ。ご。向の

偈や。書か。海。賜。ら。た。ら。さ。ら。よ。う。枕

を。書。臨。見。せ。よ。羊。カ。上。て。ん。不。思。議。の。事

あ。つ。と。お。の。く。さ。ら。よ。う。讀。み。て。見。れ。ば

シ。テ。カ。上。ヨ。ウ。ク 枕の。要。又。疑。ひ。あ。く。具。一。切。功。徳。慈。眼

視。衆。生。福。壽。海。無。量。是。故。應。頂。禮

地上 此。妙。文。を。菊。の。葉。に。置。く。志。た。ら。う。や

露。の。身。の。不。老。不。死。の。藥。と。あ。つ。て

ウ。カ。上。ト 七。百。歳。を。笑。う。ぬ。ら。は。む。入。も。後。世

も。も。延。ぶ。や。千。と。せ。あ。ら。ん。面。白。の

シ。テ。上。ト 游。舞。や。あ。あ。あ。が。た。の。妙。文。や。あ

シ。テ。上。ト 地。上 此。妙。文。を。菊。の。葉。に。置。く。志。た。ら。う。や

シ。テ。上。ト 此。妙。文。を。菊。の。葉。に。置。く。志。た。ら。う。や

シ。テ。上。ト 此。妙。文。を。菊。の。葉。に。置。く。志。た。ら。う。や

●仕舞獨吟

よもぐさの千枝の帝。萬歳の我が
 君と祈る慈音重ら七百歳を我が君よ
 授け置かる處の郡縣の山路の菊水。
 こめやてきもぐさや飲むとも飲むとも盡
 きせーや書かすやと菊のまわけて
 山路の仙家よ。其まの慈音重ら入りよ
 けり。

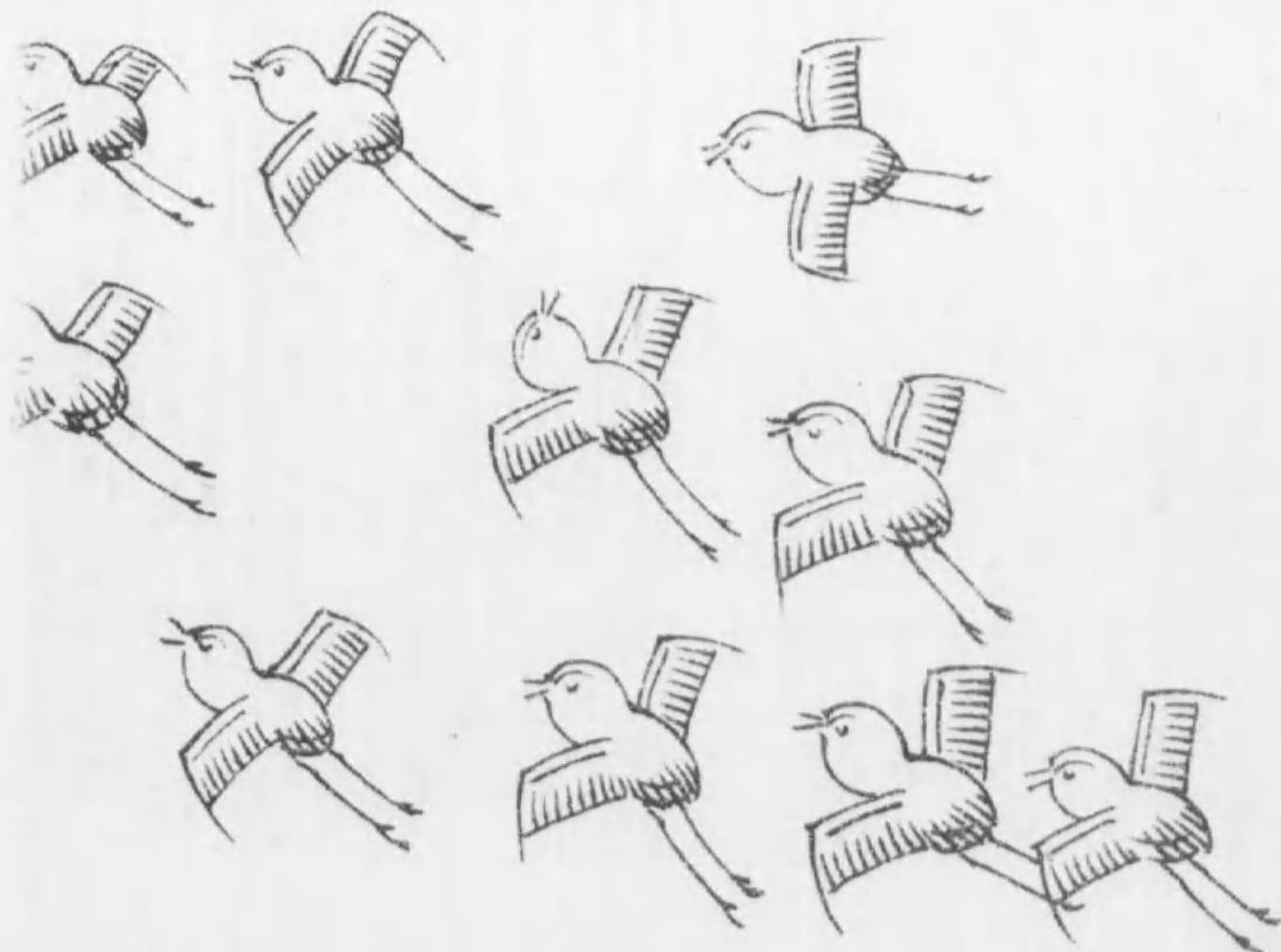
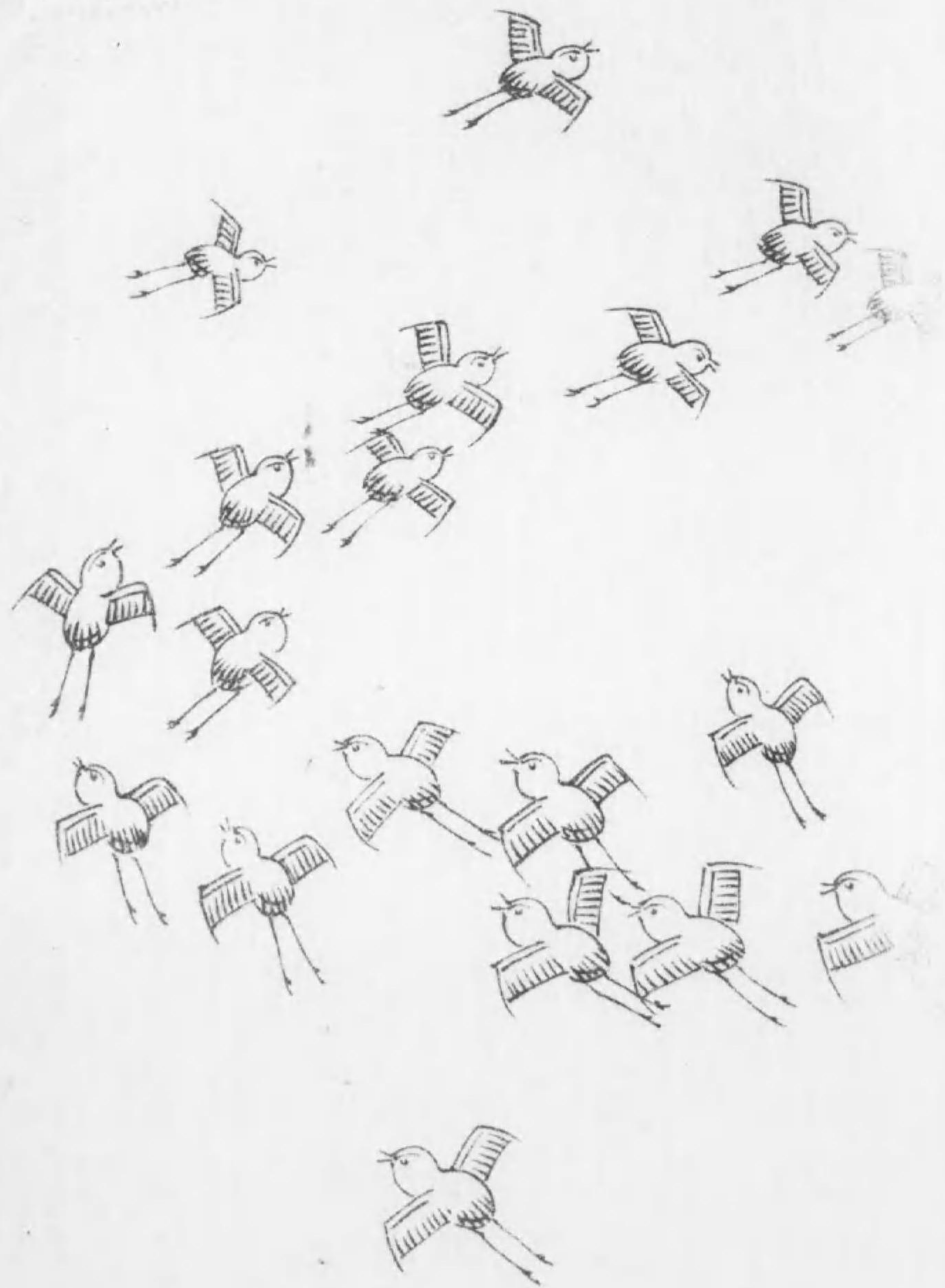
茶室

五

大正七年七月十五日印刷
 大正七年七月二十日發行
 訂正者 丸 岡 桂
 發行所 土居源左郎
 印刷所 七條式金屬版印刷所
 發行所 觀世流改訂本刊行會
 電話本局 三六〇九番
 掛電東京 一五四七五番



272
406



終

